

古田 元夫

ドイモイの三〇年のベトナム文学

ドイモイが開始されて三〇年、ベトナムが大きく変化したことは間違いない。何がどのように変わったのか、様々な描き方が可能であることが、ここでは文学に目を向けてみたい。

ベトナムでは、文学は依然として社会的な重みをもっているジャンルである。私がハノイで長期滞在しているサービスパートの近くに、文学書専門の書店があり、様々な年齢の顧客でけっこうにぎわっている。こうした本屋に並んでいる本が、以前とは大きく変化した。以前は、社会主義国ベトナムで正統とみなされている文学潮流以外の作品は、ふつうの本屋には置いていなかったが、いまでは、一時、正統派の厳しい批判にさらされたような潮流も含め、近代ベトナムに存在したほとんどの文学潮流の作品が並んでいる。作家の数も増えており、文学協会に属する作家の数は、ドイモイ以前の三〇〇人から、今では一〇〇〇人に増えているという。出版される文学作品も多様化しており、リアリズムという範疇に収まらない多彩な作品が本屋に並んでいる。

様々な潮流の文学が競い合っているという点で、ドイモイ時代のベトナム文学を、一九三〇年代と並ぶ時代とする人もいるが、いくつかの問題も指摘されている。過去のベトナム文学は、多くの人々が認める、それぞれの時期を代表する作品をもっていたが、これぞドイモイ時代のベトナム文学を代表する作品となると、衆目の一致するようなものは存在していないように思われる。作者の傾向も、読者の嗜好も多様化し、こうした代表作のようなものを求めることが困

難になっていること自体が、現在の特徴なのかもしれない。最近では、出版される作品は増えているものの、初版の印刷は千数百部程度と少なくなっているといわれる。

また、作家たちが個人的あるいは個別的な傷痛を描くことに熱心なあまり、ベトナム戦争が終結して四〇年が経過したにもかかわらず、依然、この戦争を「敵」として対峙したベトナム人同士の和解が成り立っていないという、ベトナム史最大の痛みを、文学が描き切れていないという意見もある。

現在のベトナムで、作家が完全に自由に作品を発表できていくわけではない。検閲は大幅に緩和はされているが、廃止されたわけではなく、当局から異端視されて国内での創作が困難になっている作家も存在している。また、「真面目で厳正な作品」とみなされた作品のほうが、出版の機会を得やすいことも確かである。もともと、近年のインターネットの普及は、新たな状況を生み出している。正統派からは「真面目で厳正な作品」という範疇に入らないとみなされ、本としての出版の機会が得られなかった作品がインターネット上で公開され、話題作となることがある。といった事態がしばしば発生している。

文学に限った話ではないが、あらゆる分野で早めの世代交代が進んでいるベトナムで、「ドイモイ三〇年」ということは、それぞれの分野の中心的な担い手が、「ドイモイ以降のベトナム」しか体験していない人々になっていることを意味している。「ドイモイしか知らない」若者が、どのようなベトナム文学を築いていくのか注目したい。

ふるた もとお/日越大学（在ハノイ）学長、東京大学名誉教授

1949年生まれ。専門はベトナム現代史。主な著書『ドイモイの誕生』青木書店（2009年）、『ベトナムの世界史 増補新装版』東京大学出版会（2015年）など。